大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

童話に学ぶ？ アンチエイジング：女には「美」男には「力」を求める物語？

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15902

第１回講演

童話に学ぶ？ アンチエイジング

――女には「美」男には「力」を求める物語？

堀江　珠喜

アンチエイジング・ブームである。この言葉を聞かない日はない。それどころか、テレビは四六時中、化粧品やサプリの通販CMを流しているし、紙媒体のマスコミも同様だ。（ここで気がつくのは、昔からの物語に似て、女性にはシミ・シワ対策の化粧品を勧める――つまり「美」を求めさせているわけだ。伝統的な物語において､ヒロインは美しさが第一条件であり、男性主人公には腕力、知力、気力、財力などの「力」が求められる。たとえ貧しい男でも、その知恵と勇気で財力を掴むのだ。）

そこで、今回は、アンチエイジングの世相を皮肉る意味もあり、また、実際的な効用も求めて、童話からそのヒントを得たい。その際、物語を私は「勝手読み」する。つまり、自分に都合よく解釈して楽しむのだ。この方針で以前、単行本『名言に学ぶ恋愛の扉36章』（国書刊行会）を著した。高校時代、現代国語科目劣等生（私）の、反逆的文学研究法なのである。

《祖母は39歳で「お婆さん」！》

一般論として現代シニア日本人は､その一代前までに比べると若々しい。そう認識してはいたが、生後５カ月の私を抱く母方の祖母の写真を見て、そのときの彼女の歳を計算すると63歳、つまり、現在の私と同い年であることを知って驚いた。相変わらずミニ・スカートとハイヒールを好み、長

髪はワンレングスの私に比べて、写真の祖母は地味な普段着の着物で、髪は和風に纏めている。どこからどう見ても、りっぱな「お婆さん」だ。

ただし、その顔にシミやシワは目立っておらず、髪も染めているわけではないが、黒々としている。しかも孫を抱いたまま近所を歩くくらい元気だった。２年前に右股関節を人工骨に換えたため重い物は持たないよう、執刀医に言われている私とは大違いだ。黒色に染めていなければ、私のほうが白髪が多いかもしれない。どうやら、この「お婆さん」の中味は、今の私より若いようだ。

しかしながら、祖母に初孫が産まれたのは、彼女が39歳のときだった。もうアラフォーで「お婆さん」となり、84歳で亡くなるまで、つまり人生の半分以上を「お婆さん」気分で過ごしたわけだ。これでは「お婆さん」に見えても仕方があるまい。

その点、我が母（この祖母の娘）は、一人っ子の私が子供を作らなかったため、「お婆さん」と呼ばれることもなく、ずっと「お嬢ちゃん」気分のまま86歳で亡くなった。

さて、長谷川町子が『サンデー毎日』に連載していた「いじわるばあさん」の老ヒロインは、いったい何歳くらいなのだろう。書生を置いていた裕福な家で育ち、女学校を卒業してすぐに見合い結婚し、彼女の長男が会社の部長で孫が高校生という設定なので、70歳前後というところか？　しかし63歳でないとも断言できない。しかし、彼女は「ばあさん」そのものである。

さらに長谷川町子の『サザエさん』で、（当時の定年は55歳だったから、現役で働く）波平は50代初めと思われる。そしてその妻は、ワカメちゃんの年齢からみても40代半ば、せいぜい後半だろう。現代の感覚からすれば、この夫婦はかなり老けている。

ちなみに、日本において最初に「アンチエイジング」なる言葉が書物のタイトルに用いられたのは1999年であることが、国会図書館蔵書から確認できる（アンドリュー・ウォン著『気づかれずに自然に若返る最新アンチエイジング美容形成』）。かつて、祖母や、いじわるばあさんや、サザエさん一家の時代は、誰もが、エイジングを受け入れていたのだ。ところが、

高齢化の社会現象において、現代人は、老化を認めたくない――そこにビジネスがつけ込み、そのビジネスによって「アンチエイジング」信奉が強化されたのだろう。

たとえば有名化粧品会社も「たった９週間でこの効果！これ、本当の話です！」などと目尻とまぶたのシワとくぼみが改善される様子をビフォー＆アフターの写真で見せ、巧みに商品を売ろうとする。写真が簡単に嘘をつくという事実は、若い頃に見合い写真をプロに撮ってもらった者ならわかっているはず。今は、パソコン修正など、素人でもできる。それでも、藁にもすがりたいアンチエイジング熱望者が、「個人差があります」で、効果がなくても許される商品を購入し続けるのだ。サプリにおいても、同様だ。

しかし、それらが本当に健康的なのだろうか？　先述の祖母は、当時のことだからアンチエイジング商品とは無縁だったが、「いつの間にか骨折」もせず、老衰で亡くなる半年前までは、自宅の居間できちんと背筋を伸ばして正座していた。（小柄ながら、かつては「ごりょうはん」として、住み込みの使用人や書生たちに君臨する立場であったことの、いわば「後遺症」である。）

《アンチエイジングはアート！》

さて、そもそも英文学科出身の私が研究していたのは、アイルランド出身の英国作家オスカー・ワイルドである。彼は、バイセクシュアルで特に美青年、美少年を好む美意識のためか、「若さ」を重要視し、自分の年齢も２歳若く述べるほどだった。（そのため、1854年の誕生年が、1856年と記されている事典もあるほどだ。）

彼の警句にも、youthに関するものが幾つかあるので、挙げておこう。

1. To get back one’s youth, one has merely to repeat one’s follies.

2. Young men want to be faithful and are not, old men want to be

faithless and cannnot.

3. The tragedy of old age is not that one is old, but that one is young.

4. Hesitation of any kind is a sign of mental decay in the young, of physical weakness in the old.

5. Youth is an art.

6. Those whom the gods love grow young.（Those whom the gods love die young のパロディ）

ここで注目したいのは、５のyouthがartであるとの文だ。英語のartの語源であるラテン語arsは人間の技術、仕事を表す。つまり、「アート」は「自然」と対立するのだ。「自然」なら年月とともにエイジングが当たり前だ。すると「アンチエイジング」こそ、まさに「アート」、人間が自然に対し、抵抗する技なのである。

ワイルドにとっては「若さ」がartであり、また芸術至上主義・耽美主義者の彼にとって、artとはbeautyであった。そんな作家を研究してきた私が、その影響を多少なりとも受けないはずがあるまい。

というわけで、2017年２月５日付けの「朝日中高生新聞」の「私の母校、神戸女学院中学部・高等学部」のシリーズに私へのインタビューが掲載されるにあたり、ひと工夫することにした。後輩に当たる神大教授、つまり10歳以上若い先鋭の研究者とともにカラー写真付きで紹介されるらしい。そこで、いかに写真では（つまり容姿では）負けないか、負けてもその見かけ年齢差を出来る限り縮めることを企んだのだ。まったく「大学教授」らしくないこだわりだが、それこそがワイルド研究者の「アンチエイジング」の技（art）だ。

カラー写真であることを意識して、ピンク色のセーターと白いミニ・スカートで顔色が良く見えるよう、また、ピンクのハイヒールを履き、足先

まで撮らせた。全身が入ることで、顔が目立たなくなる。読者の視線は、まず、私の足に注がれるはずだ。顔より足のほうが、年齢は誤魔化せる。ストッキングを履いていればなおさらなのだ。その結果がどうかは、読者の皆様のご判断に任せるが、本人としては「成功」と納得している。めでたし、めでたし。

《浦島太郎から学ぶアンチエイジング》

では、よく知られた童話・昔話から、アンチエイジング法を探ってみよう。どうやら、「不老」で誰しもが思いつくのは、『浦島太郎』のようだ。

年月が過ぎることにより老化するなら、時間経過の異なる次元においては、エイジング速度も変わるはず。この物語では、陸とは別世界の海の底において、時の移る速度が極端に違っていた。だから浦島太郎は歳をとらなかった。が、お土産の玉手箱を開けると一瞬にして老いる。この中には圧縮された時間が入っていたのだろう。そして彼は陸の時間を取り戻してしまったのだ。

これは亀を助けてやった報いのハッピーエンドなのだろうか。考えれば考えるほど、SF的で不可思議な話だ。もちろん浦島太郎の社会的身分では、竜宮城でのような贅沢・快楽は、陸上では望めない。すると、こんなバブリーな経験をした若者が、その後、陸での漁師生活を続けるのは辛いに違いない。なら、一挙に老化して、死までの時間を縮められたのは、ある意味、ハッピーエンドとも考えられよう。乙姫の魅力が忘れられない男が、陸上で身分相応の娘と恋におちるとも思えないが、そんな甘い事態が起きないように、嫉妬深い乙姫が、玉手箱に「老い」を仕込んだのかもしれない。竜宮城という名の通り、乙姫の正体は竜、つまりロイヤルな蛇だ。弁財天の例からもわかるように、蛇は嫉妬深いのだ。（そういえば、絵本などでは、乙姫の姿は弁財天とそっくりではあるまいか？）

さて、この物語から学ぶアンチエイジング法とは？ —— 年月の経過を忘れる！

私の祖母のように39歳で、「お婆さん」となり初孫の世話をすると、否応なしに年月の経過を実感してしまう。前述のワイルドの警句１のように、歳を忘れて若き日の愚行を繰り返せば、それこそがアンチエイジングなのだ。

《『眠れる森の美女』の場合》

待望の姫誕生を祝う宴に招待されなかった妖精がかけた呪いは、別の妖精によって「死」ではなく「眠り」に軽減されたが、その予告通り、15歳で彼女は100年間、眠ることになる。「眠り」とは「死」の一種だ。また茨で城が覆われるが、それは「埋葬」を表す。しかしそんな姫を蘇らせたのはイケメン王子。

さて、この物語から学ぶアンチエイジング法とは？

１．充分な睡眠
２．オゾン浴と紫外線対策（森の中、しかも茨で覆われた城の中では日焼けしない）
３．仰向きで眠る

ときに「美容」と「健康」との維持方法が相反する場合がある。日焼けは肌の大敵だが、ビタミンDを体内で作るには、日光に当たることが必要。もちろん食べ物からの摂取も可能だが、吸収は別問題だし、それとともに不要なカロリーも取ることになるなら考えものだ。

また３の「仰向きで眠る」は、白雪姫においても同様であるが、死者はそのように寝かされるものだ。死者は歳を取らないからアンチエイジング向きの話のようだが、ここではもう少し科学的な見解による。

2011年にメキシカン・リビエラクルーズのサファイア・プリンセス船上で、アンチエイジング講座に参加した際、講師の美容外科医から受けたアドバイスが「仰向きに眠る」ことだった。

理屈はこうだ。若いときと違い、中年以降の肌や肉体は、重力に逆らえ

なくなり、徐々に垂れ下がってゆく。よく、かつての同級生から、体重は変わらないのにスカートが入らなくなったと愚痴られるが、まさに原因は肉の「垂れ下がり」である。

この厄介な重力は、24時間、我々にのしかかる。ならば、その力を借りてリフトアップ、シワ伸ばしをしようというのが、３の発想なのだ。

つまり、眠っているときに顔を仰向けにしていれば、その上に重力がかかって、皮膚や筋肉を下方へ引っ張ってくれるはず。この力を毎晩、受けていれば無料のシワ伸ばし（とまでは言わずとも、せめてシワ予防）になるというわけだ。

ただし、ずっと仰向きでいると腰に負担はかかる。身体のためには寝返りが好ましい。健康とシワ予防では、どちらが優先順位が高いか、女性にとっては悩ましい選択となろう。

《『白雪姫』の場合》

この物語から学ぶアンチエイジング法とは？

１．リンゴを皮ごと食べる
２．日焼け防止（白い肌をキープ）
３．鏡と仲良くする

英語には、毎日一個のリンゴで医者いらず、という旨の諺がある。とりわけ白雪姫のように、皮をむかずにかぶりつくのが、老化防止のポリフェノール摂取にはいいらしい。ただし彼女の場合は毒入りで、残念な結果になりかけた。

さて、白雪姫の美しさの第一ポイントは、雪のように白い肌だ。日本でも、昔から「色の白いは七難隠す」と言われている。古今東西、色白が美人の条件のようだ。それはなぜか？

いくら白人でも日焼けはするし、その結果、有色人種に比べ、より肌を傷める。そんな肌では美しくない。つまり、日焼け防止クリームのない時

代の屋外労働者は、もともと色白でも、紫外線により肌は赤くなり荒れていただろう。

いっぽう、身分の高い女性は、屋外長時間労働から免れているわけで、白雪姫でなくても肌は白いはずだ。そのうえ、贅沢な衣装やエレガントな作法に合わせ、少々の醜女も美しく見えたことだろう。古今東西、人々はセレブに憧れる。セレブ女性は美しいと誰もが思い込む、あるいは勘違いする。つまり、「美しいお姫様」ではなく、「お姫様だからこそ、美しい」のである。

私が十代後半頃には、「小麦色の肌」が大流行した。マイナー派の私は、ハワイに行ったのもわからないくらい日焼け防止クリームを塗ったが、やがて時代は「美白」一辺倒になった。紫外線の量が増えたためかもしれないが、最近ではヒステリックなまでに「ホワイトニング」が、美容の合言葉になってしまった。

さて、白雪姫の継母は、自分の美しさについて「鏡」に尋ねる。鏡と仲良くする、つまり、始終、鏡で我が身をチェックするのは、アンチエイジングにとって重要だ。この継母の場合は魔法の鏡だから言葉を発する。

白雪姫が適齢期になったとき、当然ながら継母はアラフォー世代。そろそろお肌の変化を認めざるを得ないが、まだ諦められない。鏡に言われなくても、それなりに自覚はあったはずだ。鏡は忖度することなく、現実を述べる。

面白いのは、継母が相対的な美を求めたことである。白雪姫さえ亡き者にすれば、確かに継母はナンバーワン美女の座を守れるが、彼女の美の衰えを止めることはできない。それなら、白雪姫を良きライバルとして、継母自身、努力し向上することが肝心だったのだ。ナンバーワン美女の白雪姫だって、そのうちには老いる。勝負はまだこれから！と、挑戦し続けたほうが賢明だっただろう。

《『シンデレラ』の場合》

この物語から学ぶアンチエイジング法とは？

1．体を冷やさない
2．スイーツを控え、体を動かす
3．ハイヒールを履く

シンデレラとは「灰被り」、すなわち寒い夜に暖炉の燃えカスの上で灰まみれ状態で眠る彼女を、義姉たちがからかって、こう呼んだのだ。20世紀初頭までは、北部・中部ヨーロッパの冬、天井の高い大邸宅では暖房が充分ではなく、結構寒かった。富裕層においても、暖炉に近寄りすぎたため、ゴージャスなドレスの裾に火が移り、焼け死ぬ女性がいたくらいで、オスカー・ワイルドの異母姉妹二人も、そうして亡くなった。

従って、シンデレラの義姉二人も、真冬に暖かさを享受していたとは思えない。もしかしたら、シンデレラがもっとも暖をとっていた可能性もある。身体を温めるのは、新陳代謝をうながし健康にも美容にも良い。

また、シンデレラの時代には、砂糖が貴重品だったはず。そこで彼女の口にスイーツは入らずとも、義姉たちは頬張ったに違いない。その結果、どうなったか？　家事はシンデレラ任せだし、スポーツをしていた様子もないから、義姉たちは太る。20世紀初頭まで、細いウエストは西洋において女性の美しさのひとつのポイントだった。粗食と労働の結果、細いウエストを保ったであろうシンデレラに比べ、義姉たちはどうだったか。

太ると、多少は足も大きくなる。小さな足、小さな手は、西洋において伝統的な美女の条件だった。痩せていたと思しきシンデレラは、義姉たちに比べて小さな足だったと推測できよう。あるいは、肉体労働で動いていたシンデレラの足は、座りっぱなしの義姉たちのエコノミー症候群的足に比べ、むくみが少なかったと思われる。

さらに、義姉たちは、菓子の食べ過ぎで虫歯が多かったかもしれない。日本では明治の初めまで「お歯黒」の習慣があったように、白い歯が美女の条件ではなかった。それどころか、手で口を隠すようにして笑う仕草が女らしかったように、歯は人前で見せてはいけない、おそらくは黄色く汚い部分だったのだ。だからこそ黒く染めてしまったと考えられる。

だが、西洋では伝統的に、真珠のように白くて揃った歯が「美女」に求

められた。シンデレラは、砂糖菓子が与えられなかった分、美しい歯に恵まれたのではあるまいか。

健康な歯は、若さの象徴でもある。また健康な歯によって、消化器官の健康が保たれ、そのおかげで体調も良好に保たれる。入れ歯が年寄りの象徴なのとは対極にあるのだ。

さて、シンデレラといえば、ぴったり入る靴を連想するが、物語にはハイヒールとの断りはない。だが、我々がイメージするのはハイヒールだ。ハイヒールを履きこなすには、強い腹筋が必要だ。そのためか、私の女友達で、ハイヒール好きの者たちは、土偶体型ではない。ただし、長時間のハイヒール使用は、腰に負担をかけ、外反母趾の原因とも言われる（もちろん、個人差はある）。体型か、健康か、またまた女性たちには悩ましい選択だ。

《『赤ずきんちゃん』の場合》

この物語から学ぶアンチエイジング法とは？

１．赤を着る
２．姿勢と動き（様子）の違いに要注意
３．美しい手

前述のように、赤系の衣服は顔色を良くみせる。「ニューズウィーク」（2017年６月６日）によれば、2008年に「赤い服を着た女性はより魅力的に見える」という主旨の論文が発表され、各メディアが「デートは赤い勝負服で決めよう」というキャッチーな見出しで紹介したのだそうだ。その後、この「赤のモテ効果」を疑問視する研究がなされ発表されたが、メディアはこちらには興味を示さなかったとか。結局、「モテる」という話が、モテるようだ。

そもそも、赤を着るからモテるのではなくて、一般論として、モテるタイプの、自信のある女性だから「赤」を着るのではあるまいか。日本では

「可愛い」がモテるが、欧米では「セクシー」がモテる。男性が求めるようなセクシーではない女性が赤を着ても、セクシーには見えないというのが、おそらくは「赤モテ効果」反論実験の根本にあるように思われる。

いずれにせよ、間違いなく「赤」には、たとえば青に比べて、食欲を刺激する、血圧を上げる、活動を促進するなどの効果はある（個人差はある）。赤ずきんちゃんは、赤を纏っていたために、オオカミの食欲を促したかもしれない。

日本には、還暦で赤いちゃんちゃんこを着る風習があるように、「赤ちゃん」にまでは若返らずとも、派手な、あるいは綺麗な色でシニアライフを楽しく暮らすのはいかが？

さて、オオカミは先回りし、お婆さんに化けてベッドにはいるが、赤ずきんちゃんは、なんとなく様子が違うことに気がつく。

よく「後ろから歩く姿を見たら、どこのお嬢さんかと思った（ら、前に回ったら、凄いババア）」というのは、決して悪口ではない。そう、前から見たらシニアでも、歩く後ろ姿がヤングなのは、たいしたものなのだ。そもそも後ろ姿は無防備だし、なにより「動き」は残酷なほど加齢を表すものだから。

いくら美容整形に大金を注ぎ込んでも、その姿勢や動きで、やはり高齢者だね、と感じさせられることがある。自らを広告等としている高名な大手美容外科経営医師だが、なるほど顔は30歳代にも（見方によれば20歳代にも）見えるが、動きは80歳代かと思ったら、実際は72歳と聞いて驚いた。あれなら私の母の72歳のころの「動き」のほうが、よほど若々しかった。

ただし最近の美容外科の技術進歩はめざましく、以前は無理といわれた首や手の皮膚にも対応できるらしい。だが、赤ずきんちゃんが、オオカミの手を見て、疑念を抱いたように、手は顔よりも、誤魔化しにくい。つまり、「手」が年齢を表すのだ。顔のケアと同様、手もいたわってあげようではないか。

《『醜いアヒルの子』の場合》

皆からいじめられていた醜いアヒルの子は、その後、美しい白鳥に成長したというこの話は、私にひとつの疑問を生じさせる。白鳥は本当に美しいのだろうか？

物心がつく頃から我々は、白鳥は優雅で美しいと大人たちから刷り込まれてきたのではあるまいか？　確かに、スターリンも大好きだったと伝えられるバレエの名作『白鳥の湖』は、美しいと思う。しかし、踊っているのは、白鳥ではなく美しいバレリーナだ。そりゃ、美しいに決っている。だが、アヒルの美的感覚で判断すると、あの首長鳥は不格好に違いない。

ときに我々は、伝統的「様式美」を、疑いもなく受け入れ、それに従って感性を育てている。しかしながら私の母は、時折、それに反発した。ひとつは「舞妓」に対してである。「あんなに顔を不自然に白く塗るから、歯が汚く見える」と、ちっとも好意的ではなかった。

あるとき、渋谷にガングロ女性が集まる様子をテレビで観た母が、眉を顰め溜息をついたので、私はこう尋ねた――「京都の舞妓は白いけれど、渋谷のガングロは黒い。似ていると思わない？」　すると母は、珍しく私に同調し、こう言った――「なるほど、そうね。それに舞妓はコッポリを履いていて、ガングロは厚底靴。確かに似てるわね」。母は嬉しそうだった。私は、母の鋭いコメントに彼女がまだボケていないことを認識して嬉しかった。

似ているわけがない、という方は、舞妓の不自然な化粧を様式美として受け入れているのに対し、目新しいガングロについては、そうできないだけだ。

人はそれぞれが、異なる感性を持ち、髪の色が異なっていても構わない。マイノリティを差別、排除するのではなく、各々が認めあって、学ぶべきは学び、活かすべきは活かす――アンチエイジングにおいても、同様で、さまざまなところに、ヒントは見つけられるのである。

（本稿は、2017年12月２日の女性学講演会で語った内容を改稿したものである。）